

ち上がりがにぶったが、私の話が続いて話

しはじめた。「これは消防自動車で、今火事になった所を消しに行くところ。ゆっくりはしないとだめだから」「そうだ。はやく走らないと他の所も燃えてしまうよ」とこれはみている子ども達からの声。「火事は消えたの?」「うん、きえた」「ああよかったな」こうして絵をみながらの話し合いはどんどん進められていった。説明する子ども達にとっても反応があるから話もしやすかったのだろうし、また話したい気分になっていったのだろう。こうして少しづつでも話しはじめたS君。雪の降ったある日、S君登園するなり「先生、うちの『ねこ』死んだわ」「あらどうしてなの?」「どうしてだかわかんないけど、よるのうちにわらの中で死んでたの」と元気なきそうに話した。それからその『ねこ』のことについて少し話し合った。またある時には「先生、きのうね、ぼくチョココレートとシュークリームとケーキを食べたんだよ」「わあよかったね。そんなに食べてお腹大丈夫だったの?」「うん、大丈夫だったよ」と、きわめて簡単な会話ではあるが、話してくれ

るまでになった。

こうして考えてみると、生れつき無口という子は別として、普通話さない子(話したがらない子)というのは、自分から話し出そうという雰囲気の中にいないからではないだろうか。どうしても話さずにおれなくなるような雰囲気は私共がつくってやらないからではないだろうか、と反省させられた。と同時に家庭にあっては、子どもが話すべきことまでも親が話してしまわないように気をつけ、少しずつでも子ども独自の心を養っていくようにしていいたらよいと思う。(仙台)

めだかずいひつ

M子のわがまま、

Y子のわがまま

うすき たほ

帰る仕度をして腰かけている子ども達と当番の引きつきをしている時である。ランドセルを背負ったまま窓からのぞいていた

M子が、「先生」と呼びかけた。子ども達がその声に気をとられたので早速部屋に連れて座席を与えた。そして黒板にM子の名前を書かせて紹介したり、一年生の本を読んでもらったりした。M子は先輩顔で、皆の視線を浴びながら模範的態度でのぞんでいる。子ども達の間からは「上手ね」とつぶやきももれる。

このM子は、年少組から二年間、殊に年少組の時の私のメモノートに一番たくさん問題行動を記録された当事者なのである。お弁当はいつも残す。忘れものはあたりまえ。入園当初は気に入らぬことがあると黙って帰ってしまい、友達との遊びは全然できない。すぐ、かっとなって友達をつねったり、打ったりするかと思うと、集りの時はぐずぐずして一番遅い。遠足の時男の子と手をつなぐ事は絶対にいやといつて困らせる。また人の遊んでいる物を平気で取り上げ、ジャンケンで負けてもゆづらない。がまんするということもできなかった。とにかく大げさにいえば、わがままの権化のようであった。

M子の家庭は、若い男の使用人が多く、

ケースの分析——保育効果に関する考察③

この記録にある二例も、幼稚園生活を通して行動の向上した例である。問題は社会的な行動である。自分の思うことを極度に主張し、そのために社会的適応を欠いている。しかしその原因はまったく異っている。一例は常に自分の思うことが通るために生じた自己主張であり、他の一例は、自分の思うことが通らないために生じた自己主張である。どちらも自己主張であるが、その発生原因に応じて、それにながらうような指導をしなければ、保育効果をあげることはできない。この記録はよくそれをつかいわけて指導をしている。この記録にみるように常に周囲のおとながわがままを通してしている場合には、集団生活による規制が必要である。親や先生の権威ではきかない場合も、子ども同志の批判を無視することはできない。この方法で、指導したのが前者である。後者の場合は、母親から理解されない気持が子どもをいじにさせ、意地っぱりにさせているので、それにはむしろ子どもの気持を理解して扱うことが必要である。ここでは家庭訪問を通して、親にもはたらきかけて、それを行なっている。

幼稚園の保育効果というのは、子どもがただ幼稚園にくるからあがるというのではなくて、子どもに適切にはたらきかけるから、効果も上るのである。個々の子どもにとっても、全体の子どもたちにとっても、この記録にみるようにどのようなはたらきかけが適切であるかを工夫してゆくことによって、保育効果をあげてゆくことができるのである。

父母は仕事に忙しい。年のずっと離れた姉 環境である。おとなの中で思う存分わがま
が一人で同年輩の友達と遊ぶことも少ない まを通してきたM子ががまんすること、ま

た皆できめたことは守るなどということを守身につける機会は、今までなかったのである。そして強情な性格も手伝って、初めての集団生活の中で大いにわがままを發揮したわけだ。しかしM子はおとなばかりの中で育っているので話す内容もまかせていて、こちらの話も大体理解して聞けた。それで毎日問題が起るたびに、その場で皆と一しょに話し合ったり、一対一でゆっくり考えたりした。時には友達の方がM子の理屈に合わぬわがままにあきらめて、ゆずることもあったがそのような時は友達ががまんしてゆずっていることをM子に理解させた。また席をきめる時M子の両隣りは殊に被害が大きいので社会性のある元気な子ども達を配して、彼女のわがままがまわりの者に通用しないように気をつけた。一方気が向くと片づけや人の世話をせよとするとところがあるM子を見込んで、仕事を頼んだり、当番の手伝いをさせたりして、その仕事を皆の前で認めてやった。そのようにしているうちに今まで一日に何回となく起っていたM子の問題行動が少しずつへって来た。年長組になる頃にはさすがのわがままも殆ん

ど目立たなくなり、時々あのM子がと思うようなことをするようになった。帽子が床に落ちているのを拾ってきたので見ると彼女のである。前から帽子の裏にゴムなどで掛けるところをつけてくるように話してあるのにも思いながら見るとゴム紐のかわりに細くさいいた布切れを糸でゆるゆるに縫いつけてある。これは子どもの仕事だと思つて本人を呼んで聞くと、家の人に何度頼んでも縫いつけてくれなかつたので自分でしたという。私は約束を守るためにこんな日まで努力するようになったM子の成長がうれしかった。また園だけでは遊び足らず、いつ相談がまとまったのか弁当のいらぬ日には四、五人の友達と弁当をもって再び現われて、すべり台の下などで楽しそうに会食することもあった。時にする喧嘩も筋が通つてきて、手を出すよりことばで解決させるようになり、卒園して今は、こうして折を見ては幼稚園に立ちよってゆくのである。

父の日に黒い機関士の服を着た父の絵を描いていたY子は、一年保育児で両親のほかに妹ひとりの四人暮らしである。入園当初

は目立たなかつたが、だんだん遅くなるようになった。時には母に引きずられて泣顔で部屋に入ってくる。母の話によると朝から一文句いつてからでないかと家を出ようとならないのだそうだ。「友達が先に行つたから行かない」とか、「友達と喧嘩したから行かない」といったり、家でもわがままで、妹をいじめて困ると心配顔である。園では家の近所の友達とブランコに、ままごとにとよく遊ぶが表情の明るい方ではなかつた。ある朝、例の如く母に引きずられてくるY子と逢い、私が引きついで、一しょに園まで来た。みちを歩きながら、さっきからのつづきのように「お母さんは、すぐ打つから嫌いだ。妹の方が悪い時でも私をおこる」とひとり言のようにいつている。私は愛情が不足しているのではないかと思つた。そしてすぐ母の気持をそこねないよう気をつけながらY子の淋しがっていることを手紙で伝えた。その後少しはY子の気持がおちついていたようだが、母に逢つて聞くと、朝からの機嫌はよくなつたが、家ではやっぱりとこぼしていた。私は、ゆつくり時間をかけて家庭訪問をした。母は

ぼつぼつY子の日常生活を話していたが、膝の上に腰かけている妹が病気がもとで赤ん坊の時からまだ歩かず、一日中手がある事をつけ加えた。母が不自由な妹の手足となつていろいろのことを世話する忙しさにとりまぎれ、手のいらぬY子にはつい淋しい思いをさせていたのである。それで母にわがままをいつたり、妹をいじめたりして自分の存在を知らせていたのだ。それを母は表面の行動ばかりに気をとられてY子を叱り、結果として、いらいらさせていたようだ。親は平等にしているつもりでも幼い者にとつては、親の気持はまだ理解できない。私は時にはY子を思う存分甘えさせてくださいと頼んだ。そして彼女には不自由な体の妹をいたわるようまた姉としての自覚をもつようはげました。それから次第にY子は朗らかになってきた。しばらくして母に会うと妹を可愛いがるようになったとの事であった。今では朝から仲良しの友達と肩を組んだり、スキップしたりしながら登園してきて、家族の事をたのしそうに私に報告するようになった。

(熊本)